



# 「妙高市民の心」作文 優秀作品集（中学生の部）

最優秀賞

## あいさつと私とおばあちゃん

新井中学校3年 佐藤 さくら

「おはようございます！」私は今日もしっかりと声をだし、元気のいいあいさつをする。「おはよう。」と、近所のおばあちゃんがほほえみながら、優しいあいさつを返してくれる。このおばあちゃんは、登校時間にいつも外に出て、私達に優しくあいさつをしてくれる。とても明るい人なのだ。私は、このおばあちゃんとの短い時間が大好きだった。この時間のために、毎日同じような時間帯に家を出ていくぐらいだ。

しかし、自転車通学が再開すると、そうもいかなくなった。自転車だと、おばあちゃんに会うための時間の調整がしづらかったのだ。それだけではない。仮に会うことができても私は自転車に乗っている。だからおばあちゃんのあの優しいあいさつが返ってきたとしても、ほとんど聞こえないのだ。私も最初の頃は、おばあちゃんを見つけると減速をしてあいさつをしていた。だが寝坊をしたり、家でのんきに過ごしすぎて遅刻寸前な日が増え、おばあちゃんの家の前で減速する余裕が減っていった。そしてしばらくして、おばあちゃんの家近くに来て、止まることはほとんどなくなってしまった。そして、ただ「おはようございまーす。」と、顔を見る





こともせず言うだけになってしまった。自転車通学が始まったばかりのときは微かに聞こえていたおばあちゃんのあいさつも、もう聞こえなくなってしまった。

そのようなあいさつとも言えないあいさつをすることが当たり前の日常になりかけていた頃、妙高市は梅雨入りした。私は安全の為に、小雨以外の日は自転車通学を自粛した。私はその日、偶然まだおばあちゃんと心の込もったあいさつをしていた時間帯に登校していた。そして、久しぶりにおばあちゃんの顔を見て、あいさつをした。しかし、私の口からでてきたのは、いつものようにまるで心の込もっていない「おはようございます。」だった。自分自身にがっかりし、そのまま立ち去ろうとした。だがその時、「おはよう!!」と元気のいいあいさつが返ってきた。驚いて振り返ると、おばあちゃんが笑顔で立っていた。啞然とする私に言った。「お姉ちゃん、最近元気ないでしょ？だから前みたいに元気になってもらいたくて、お姉ちゃんの明るいあいさつを真似したのよ。」私は、自分の勝手な都合で地域の人を心配させてしまったことを心から申し訳なく思った。そして、あいさつには心を込めないといけない理由を理解した。あいさつが心のキャッチボールとは、こういうことだったのだ。だから、私は笑顔で「ありがとうございます。ってきます!」とあいさつをした。

「おはようございます!」次の日、私は久しぶりに元気よくあいさつをした。「おはよう」おばあちゃんは、元気が戻った私を見てとても嬉しそうに笑っていた。私はその笑顔を見て、たくさんの人に元気よく、心のこもったあいさつをしていきたいと、強く感じた。





優秀賞

## 優しい人になりたい

新井中学校2年 市川 玲奈

「あ、またゴミが落ちている。」最近歩道を歩いていると、よくゴミが捨てられているのを見かける。ときどき、花が踏みつぶされていて、茎からポキッと折れてしまっているのを見かける。私はそういうゴミや花を見て、とても心が痛くなるのを感じる。どうして人間という生き物は、そんなひどいことをするのだろうと疑問に思う。だから私は、花を増やす活動や、ゴミを拾うボランティアをしたいと考えた。

まず私は、生徒会の緑化委員会には入った。そして早速、花を植えることになった。花の名前は日々草だ。日々草の苗を見たとき、小さくて、白や赤の色がきれいな花だと思った。その花で花壇が埋まったら、すごくきれいに見えるだろうなと思った。しかし、植えるのは簡単なことではなかった。まだ弱く小さな苗を植えるときに、茎が折れてしまったり、土を掘る深さが足りなくて、根の部分が全て地中に入らなかったりした。私は花が折れてしまったとき、とても悲しかった。だから、次に植えるときは丁寧に植えようと思い、時間をかけてゆっくりと植えた。心の中で「元気に育ってね。」と気持ちを込めて。無事に植え終わったとき、花に命が宿った気がして、とても嬉しかった。花を植えるとこんなにいい気持ちになるんだ、と実感した。

次にゴミ拾いをしようと思った私は、近くの公園のゴミ拾いのボランティアをし





た。公園には、丸まったティッシュやつぶれた缶、食べ終わった弁当などが散乱していた。それを見た私はまた、悲しみに心が痛くなった。私は暗い気持ちのまま、ひたすらゴミを拾った。しかし、ゴミを拾い終わって、何も落ちていない公園を見たとき、とても空気がきれいになったように感じた。同時に私の気持ちもきれいになった気がして嬉しかった。もっとゴミを拾いたいと思った。

そこで私は考えた。「ポイ捨て禁止」や、「花を植えよう」という呼びかけがもっとできるのではないかと。例えば、町内の目に付くところにポスターを貼る。飛ばされるとゴミになるので気を付けて貼る。あるいは、回覧板に挟んでもらうというのもどうだろう。やってみよう、と私は思った。私は、もっとたくさん花を植えたいし、もっとたくさんゴミを拾いたい。花を植えたら自分が温かい気持ちになるのはもちろん、通る人も心がいやされるだろう。ゴミを拾えば、その場所がきれいになるにつれて、自分の心もきれいになっていくのがおもしろい。だから私は、花を植えたり、ゴミを拾ったりするボランティアに積極的に参加したい。それだけでなく、歩道に落ちているゴミを拾えるような人になりたい。ポイ捨てをするような人間には絶対になりたくない。そして、私たちが住んでいる妙高の街を美しく保ち、みんなが笑顔でいられるように行動したい。人にも、自然にも、環境にも、優しい人に私はなりたい。





優秀賞

## 欠けてきたあいさつ

妙高中学校3年 霜鳥 珠花

「珠花ちゃん、年頃だねえ」苦い笑顔を浮かべながらそう言葉をかけてくれるおじさんが、今も脳裏に焼きついて離れない。

小さい頃から私は、元気が取柄だと周りから言われてきた。元気と言われる理由の一つに、挨拶の良さが入っていた。今となってはもう、きっと挨拶なんか評価されてはいないと思う。そう自覚がある程、私は自分から挨拶をすることが無くなった。相手から声をかけられれば、一人言のようにボソッと返す。笑顔なんて微塵も無い。仕方がない。恥ずかしいのだ。自ら声をかけることが。怖いのだ。挨拶したとて返って来なかったことがあったから。そんな自己防衛を言い訳に、人との距離を取った。周りにどう言われようが、身内に怒られようが、その場しのぎで心のもっていない反省をし、「だからなんだ」「私の自由じゃないか」と内心毒突く。改善しようとなんて思ったことなどない。いや、なかったのだ。冒頭の言葉を、かけられるまでは。

それは、あまりにも唐突な出来事だった。最高 学年となり、受験やらなんやらを軽く想像し、浮かれた気持ちで見慣れた道に沿い下校していた。着実に自宅へと近づくにつれ、それと共に視野に入るのは、かつて私と1日の始まりと終わりの挨拶を交わしていた、近所のおじさん。せっせと愛車を磨いているおじさんを横目に、





私は一言も交わすことなく素通りする。そんな行動は、別に珍しいことでもなく、寧ろ日常茶飯事と化していた。「おかえり～」と温かく声をかけられれば、まあ適当に返しておけば良いだろう。変わらぬ思考だった。

「おかえり～珠花ちゃん」

先程脳で再生した言葉が、そのままかけられるので、思わず立ち止まる。「あ、ただいま…」聞こえたか、聞こえていないか。今にも消え入りそうな声で返す。ろくに目も合わさずに、最悪な態度だった。自覚もある。ただ、今更直せなく、引くに引けない状態になってしまったのだ。居たたまれなくなり、無意識に早足になっていくのが分かる。何故だか分からないが、今すぐ逃げ出したかった。逃げたかったのに。

「珠花ちゃん、年頃だねえ」

本日二度目の足止まり。ふと見たおじさんの顔は、きっと生涯忘れることはない。息を呑んだ私は、絶え切れずその場から離れた。

無性に叫びたくなる。恥ずかしい。恥ずかしい！遠回しに注意されたことではない。おじさんにあんな顔をさせてたことに気付かずまともな挨拶をしてこなかった自分に、初めて恥を覚えた。挨拶を恥ずかしいと思っていた自分が、恥ずかしくて堪らなかったのだ。

次の日から私は、すれ違う人に必ず挨拶をするようになった。目を見て、上手く出来ているか分からないが、笑顔で。今までの酷い自分を塗り潰しているかのような感覚がした。今更ながら欠けた挨拶を取り戻した。そんな私の話だ。

